

雨のあとの虹

三木市立三木東中学校 1年 樋口 真子

私が『チーム・テスならだいじょうぶ』の本に興味を持ったのは、主人公テスが難病を抱えているというところに、私との共通点があったからです。

私は一歳半の時に難病を発症し、長期間の入院と闘病生活を経験しています。入院中はもちろん、退院していても服用する薬の影響で、外出や食事に制限がありました。いつ高熱が出るかわからず、家で過ごすことが多かったようです。その中で私は、「絵を描く」ことが友達になりました。外出できないなどの制限があったのはつらいことでしたが、おかげで絵が大好きになりました。

今、テスと私は同じ中学生です。テスは友達をつくるのが苦手だけれど、テスが大好きなお菓子作りを通して大切な友達ができました。私も中学生になり、初めて出会う子達とも仲良くなれました。そのきっかけは「絵」でした。共通点があると嬉しくて仲良くなれます。絵を描くことは、それに集中している時間も幸せで、私に自信も与えてくれて、仲間とつないでくれます。

この本の中で心に残っているシーンは、なくなりかけた学校の行事のダンスパーティーを、テスが友達とチームを組み、お菓子売ることで実現させたところです。テスの大好きなお菓子作りがみんなの役に立ったこともそうですが、何より『お菓子をみんなでつくって、それを売って資金を作ろう』と提案したことが、すごく格好いいなと感じました。提案することは、自分の考えを表に出すことです。反対されるかもしれない。うまくいかないかもしれない。とても勇気があることです。テスたちは、生徒会の承認を得ることができ、お菓子販売は大盛況となりました。しかし、もし結果が出ていなくても「考えを発信すること」、それが周りに影響を与えたことは印象に

残りました。私にはできないなあ、でもしてみたいなあ、と思いました。

心に残ったシーンは、もう一つあります。テスが学校のトイレで倒れ込んでしまった時、テス自身が今まで苦手だなと思っていた女の子が、テスを介抱してくれたことです。その子は、倒れるテスを受けとめて衝撃から守り、救急車を呼び、ずっと付き添ってくれました。テスは気を失っていたので、そのやさしい行動を知ったのは後のことです。テスが退院し学校に行けるようになった時、

「テンリー、ありがとう。」と、伝えました。私もクラス全員と仲良くできているわけではないし、苦手ではなくて、話す機会が少ない子たちがいいます。私はこの感想文の中で、好きなことが友達をつないでくれる、と書きましたが、それだけではないことにも気付きました。きつとまだタイミシングが来ていないだけで、一人一人がそれぞれの好きなことを持っていて、お互いの心を出せる機会さえあれば、素敵な関係を築けるんだと感じました。テンリーのやさしさに心がポカポカしました。

『さあ、がんばれ、わたし！変わらない真実はただひとつ。なんだって変わるってこと。ドアがひとつ閉まれば、またべつのドアがひらく。』そうだ、もったいい言葉がある。

『虹が見たければ、雨をがまんしなくちゃね。』この文章でこの本は始まります。これはテスが遠くから引越してきて、新しい生活が始まる時の心境として書かれています。前向きで明るく、強い心を持つていることが伝わってきます。テスは、病氣や困難をただ嫌なものとして見ているわけではないように感じました。雨の後に虹があることを、知っているからだと思います。

たとえば私にも、小さな虹の思い出があります。入院や通院をしていた時、注射をすることがよくありました。注射のあとは、いつも

ママがたくさんほめてくれました。そして病院の待合室の自動販売機で紙パックのりんごジュースを買ってもらうのが楽しみでした。その自販機の明かりや、ボタンを押して商品が「カタンッ」と落ちる音、ママの『頑張ったね』って頭を撫でてくれた手を覚えています。少し変に思われるかもしれませんが、私は今でも注射が好きです。それがやさしくて温かい記憶だからです。でも、お父さんもお母さんもしんどい時があったんじゃないか、と今は思います。何度も私を病院に連れて行ってくれたことに「ありがとう」を伝えたいです。

私の病気は難病でしたが、数年で寛解しました。こども園も小学校も元気に通いました。そして今は、宿題が嫌になる時はあるけれど、中学校生活を楽しんでます！

体のどこかが痛い日、心が暗くて雲がかかったような日、友達や周りの人にも、人にはいえないつらさを持っているかもしれません。私はたくさん虹をもらってきました。だから今度は、元気がない友達のために絵を描きたいです。そして、その子の「好き」を聞いてみようと思います。